

3801 新紙幣・渋沢栄一：親父の記録資料から

新紙幣、1万円札の、渋沢栄一氏は、第一銀行の頭取（明治6年創立）いい機会と資料を。時の政府が公債を募集するとか、金融界の大問題を解決する場合には、東の渋沢栄一（第一銀行頭取）西の小山健三氏（第三十四銀行頭取）、両大御所に、大蔵大臣は、意見を求めたという。



銀行の前身 両替商

両替商と云えば貨幣の交換を業とする商人で明治7年に貨幣制度が統一される迄は金貨や銀貨、あるいは銭貨等の品位、重さ、形の違う色々の貨幣が流通しており、之等の貨幣の交換を業とする商人が必要だったのである。此の様な商人がいつ頃から起つたかは明白では無いが豊臣秀吉時代には既に存在してゐた。当時の名稱は『両替師』とか『替銭屋』と云つてゐた。両替商と呼ばれる様になり立派な店舗を持って金融業務も併せて営むようになったのは江戸時代に入ってからで『日本の富の70%は大坂に有り、大坂の富の80%は今橋に有り』と云はれ大坂の今橋が経済の中心となつてゐた。大坂で両替商の創祖は天王寺屋五兵衛で寛永五年(1628)の同業とされてゐる。又有名な鴻池両替店も明暦二年(1656)の同業で、何れも大名貸、町人貸と貸付業務と預金や為替と現在の銀行業務と同じ様な金融業務をやつてゐたと云う。

親父殿は、いろいろな資料を残してくれている。

いい機会なので読み返した。



銀行の語源に就て

銀行の言葉はゆり道もなき英語のBANK(バンク)の譯語であるが、元來イタリア語のBANCO(バンコ)が語源で、[〃]棚[〃]とか、[〃]仕事台[〃]を意味してゐた。それが両替商のテーブル(机)を指すようになり、転じて銀行を意味する様になつたと云ふ説が一番有力だとされてゐる。又一般には慶応二年(1866)にホンコンで刊行された英華字典にバンクは銀行と譯されてゐる。

即ち中國では唐の時代から銀を扱ふ商店や、その標を商店ばかり集つてゐる所を銀行と云つた[〃]行[〃]とゆふのは同業者が集つて商売をしてゐる市場とか商店とゆふ意味を捧つてゐる

清の時代には銀本位の國である事から、金融機關が軒を連ねてゐる場所を銀行と呼ぶ様になつたとゆふ事である。

日本では明治三年[〃]オリエンタルバンク[〃]を[〃]東洋銀行[〃]。明治五年[〃]米國ナショナルバンク[〃]を[〃]國主銀行[〃]と譯して色々の契約若其他にあるとゆふ事である。